

# ヒロシマ、フクシマ、そして21世紀

中 川 謙

帝塚山学院大学 国際理解研究所 所長

国際理解研究所長として、講師のご紹介をするところですが、きょうは講師が私自身ですので、自己紹介ということでしてまいりたいと思います。

自己紹介したいのは、私のつまらぬ名前です。私、生まれは1945年、昭和20年です。名前は謙遜の謙です。謙虚の謙。非常にへりくだった名前ですね。実際に、「ゆずる」と読みます。とことん頭を下げている感じでして、私自身はこの名前について、そんなに気にすることがなかったんですが、小学校に入って学年が進むにつれて、ふとあることに気がついた。というのは、クラスと同級生には、「勝」という名前が多いんです。「勝（まさる）」という名前が本当に多いし、これ「勝利」とか、「勝昭（かつあき）」ともいいましてね、昭和の「昭」、勝利はまた「勝」、「勝（まさる）」君もいたし、「勝則（かつのり）」君もいたし、「勝昭（かつあき）」君もいたんです。ほかに遠征に、こういう名前の方がですね。征服、遠征、あと忠義の忠とか、親孝行の孝、私だけ、なんで自分だけこうやってへりくだった名前なんだろうと思ってたら、やっぱり同じようにこういう名前も結構多いんです。「和夫」とか、「和也」とか、「和」のついた名前です。「平」という名前も意外に多いですかね。「平一」、「和平」、「平和」。ここまで来ると、皆さん、ご賢察と思いますが、名前の性格に大きな断層がありまして、これは8.15ですね。8.15の前に生まれたか、後に生まれたかで、同じ1945年の学年生まれと学年に、名前の中に明確な断層ができていうことに気がつくわけです。この辺については、皆さん、もうもちろんよく、恐らく私と同じ年配の方も多いのでお気づきだと思いますが、俵万智さんという現代歌人がいますね。その歌の中に、こういうのがございます。「吾大、克二、健一、秀明、それぞれに命名をせし高ぶりを詠む」、これは俵さんは神奈川県立の高校の先生をしておられまして、目の前にたくさん生徒がいるわけですね。その名前を見て、「吾大、克二、健一、秀明、それぞれに命名をせし高ぶりを詠む」、親の気持ち、親が名前をつけるとき、それぞれに、それぞれの気持ちの高ぶりがあったということに思いをはせてこのような歌を詠んだんですが、我々の親である、1945年に子どもを産んだときの気持ちの高ぶりは、間違いなく8月15日を境にして大きく変わったということ。このことを僕自身は自分自身の人生として、ひとつ非常にこだわってきました。僕自身はもちろん11月の生まれです。大きく変わった戦後というものにそれなりにこだわりを持って生きてきたつもりです。

それで、今度の3.11、これは第2の敗戦ととらえる言論が一般的になっています。現代史家の

半藤一利さん、この方は第2次大戦が終わる、つまり8月15日前後の日本で何が起きていたか、日本の権力の中枢で何が起きてたかということの詳細に描いた有名なドキュメント、「日本のいちばん長い一日」という本の作者でもあり、非常にこういったことについては、するどい神経をお持ちの方です。その方が「第2の敗戦」とおっしゃっています。非常に説得力があります。僕自身がずっと一緒に生きてきた戦後というものが、とうとうこれで終わってしまったのかなという感慨も含めまして、きょうはまず第1に、あの第1の敗戦と第2の敗戦との間に、どういう違いがあるんだろうかということからお話をさせていただきたいと思います。

まず8.15には、天皇による玉音放送がありました。今度の3.11では、その5日後の3月16日に、今の天皇陛下がお言葉という形で、今回の震災についての思いをテレビを通じて、それから宮内庁のホームページを通じて、動画像で全国民に訴えましたね。だれが言うともなく、今回の言葉についても玉音放送と呼ぶようになりました。もちろん、玉音放送と言っても、軍国主義天皇制のもとでの天皇と、現在の象徴天皇とでは、立場が違います。それでも、やっぱり日本人というのは天皇がじきじきに全国民に対してお言葉を発するというときに、思うところは深いわけですね。

この2つの玉音放送、あえて玉音放送といいますが、ちょっと比べてみたんです。そうすると、おもしろいことに気がつくんですね。最初の第1の玉音放送は、終戦の詔勅ですね。これが正式な名称です。この会場には、あのラジオ放送聞かれた方っているのかどうか。私はもちろんまだ母親の母胎の中におりましたので当然聞いておりませんが、改めてもう一遍読み出してみますとね、この詔書、第1の玉音放送というのは、なかなか言ってることはわかりやすいんです。言葉はもちろん例の文語体で、ちんぷんかんぷん。何言ってるかわからないような文言ですけども、中身はかなりシンプル、簡明です。この詔書は、「まず米英2国に宣戦せるゆえんもまた実に帝国の自存と東亜の安定とを庶幾するに出て」と、これはつまり、私は戦争を始めましたよ。それは日本の自立と、東アジアの安定を目指して始めたのだと。それに続けて、「他国の主権を排し、領土を侵すがごときはもとより、朕が志にあらず」、つまり、そういうふうにした戦争ですけども、だから、決して植民地支配や侵略になってしまったことは、それは私の意図ではありませんでしたということになってるわけですね。明確には表現していませんが、日本は、日本の自立と東アジアの安定ということの名目に戦争をおっ始めましたが、それは結果的に植民地支配、侵略になってしまいました。申しわけございません、という意を酌みとっていいかもしれませんね。その後、有名な言葉が続きます。「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び、もって万世のために太平を開かんと欲す」、つまり、「この国難を乗り越え、未来にわたる平和の道を開く。戦争をやめて平和の道を歩み出すという決意表明をした上で、以上のような考えに立って、私はポツダム宣言を受諾します。連合国による降伏文を受け入れます」ということです。

このポツダム宣言、もう少しだけ中身を考えてほうがいいと思います。ポツダム宣言が言っている主なことは、もちろん「日本人早く手を挙げろ」ということですが、手を挙げた後、日本は

基本的人権、民主主義という欧米の価値観を受け入れなさいよということを明確に日本に対して要求しています。玉音放送（詔勅）でそれを受け入れたということは、日本はこれまでの道を反省し、これからは平和の道を、しかも民主主義、基本的人権という価値を取り入れた形で追求していきますよという宣言を、この詔書の中でしてるわけです。わかりやすいと思います。これがまさに8.15に起きたことです。この断絶、つまりこれまでのアジア侵略、植民地支配から日本は平和の道を歩むという、この断絶が、まさに私のような名前（謙=ゆづる）の中にあられていたわけでしょうね。これが当時の日本人、親となった日本人の気持ちの高ぶりの大きな差がこれによって生じたというふうに考えているわけです。

戦の詔勅、第1の玉音放送は、ポツダム宣言を素直に受け入れているのですが、1点だけ「すれ違い」を見つけることができます。それは原爆に対する見方です。ポツダム宣言はこんなふうに言っていますね。「我らのこの軍事力の最高度の使用は、日本国軍隊の完全なる破滅と日本国本土の完全なる破壊を意味する」、物すごいこと言っていますね。この「我々の軍事力の最高度の使用」というのは、明らかに原爆の使用を前提としています。ポツダム宣言はご存じのとおり、1945年の7月26日に発せられまして、そのわずか10日前、アメリカニューメキシコ州の砂漠の中で、アメリカが史上初めての原爆実験に成功し、原爆を手に入れたわけですね。ポツダム宣言が発せられたその11日後、8月6日に広島に落とされた。物すごい勢いですね。急ピッチ。終戦の詔勅、全体としてポツダム宣言を素直に受け入れているのですが、唯一この原爆については明確に抗議の意思を示しています。「戦局は我に利あらず、これに加えて敵は新たに残虐なる爆弾を使用して、しきりに無辜を殺傷し」、新型爆弾、つまり原爆を使って罪のない民衆を無差別的に殺傷していく。天皇の詔勅では、そこまで言っていませんが、日本政府が、あの時局にあってこの1点だけは正気になっています。この原爆はジュネーブ条約に反する、非人道兵器であるということで抗議声明を発しています。日本はこの時点で、原爆というものについては唯一人間らしい感情を示していた。それがポツダム宣言との「すれ違い」ということ。これは留意しておいていいと思います。

さて、今回の第2の玉音放送です。3月16日の天皇のお言葉の内容は、まず現状を憂いて、それから被災者、それから救援活動に従事している人へのねぎらい、励まし。海外からの見舞いの伝令を紹介し、これから復興しましょうという決意を表明し、とても心のこもった言葉だと僕は思いますが、しかし、いわゆる終戦の詔勅に見られるような、現状をどのように把握し、これから何を具体的にしなければいけないかということについては、内容ははつきしいと言っていると思います。それは今度の震災は突然に発生したものであって、日本人全体が茫然自失の状態にまだ今でもあります。そのことが1つですが、それ以上に、これからお話ししようと思うことの中身になってくるんですが、今、日本が直面している事態の重大さというのは、さきの大戦における敗戦にも匹敵する、もしくはそれ以上に規模の大きなものであって、そのことの意味を日本人はまだトータルとしてつかみきっていないというところにその真の原因があるところです。

やっぱり天皇はお言葉を発するにしても、さきの大戦時の詔勅のように、だれもが、そうだ、ととらえられるような現状認識というのは、今日本じゅう探してもないということです。これから先は、我々一人一人がそれを考えなければいけないということになるんですね。

きょうは、我々の1人である、私が、今どんなことを考えてるかということをご様に聞いていただきたいというのが、話の趣旨です。

私自身はこの66年戦後生きてきて、戦後と随分長いことつき合ってきたつもりなんです。戦後がとうとう死んだのかと。これからは何という時代なのかということで、1つ、災後、震災後という言葉が政治学者の御厨さんという方から提起されています。こういう本を書いておりますね。「戦後が終わり、災後が始まる」。「災後が始まった」ですね。災後という言葉を使っています。じゃ一体、災後って何か。参考になるのは、そこで災後というもの、それをもたらせた3.11の意味について、こんなことを言っておられます。「人智を超えたところで、人類とその文明に対する警告の意味があった」というふうに言っています。その警告って一体何なんですかって聞きたいんですが、まだだれもその警告の中身を正確に、しかもだれもが納得できるような形で提起されていないのが現状だと思います。ただ、ここで御厨さんが言っておられる、「文明に対する警告」というのは、この文明というのは、もう少しだけ限定したほうがいいように思います。この文明というのは、私は西洋文明だと思います。というのは、日本は、1868年の明治維新以来150年間、とにかく欧米の一員になることをずっと目指し進んできました。脱亜入欧という言い方をしてもいいと思います。この西洋文明というのは、その構成要素についてはいろんな意見があるんですが、大方が近代国家と資本主義、それと科学技術の一体化、その総体が西洋文明だといえるのではないかと。その3つの構成要素からなる西洋文明を取り入れることで、欧米の一員になるという点では、本当に日本はそれを急ピッチなスピードでたくみにやって見せました。欧米化という点では、日本というのは戦前もやっぱり成功モデルであったということは疑いないと思うんですが、この成功モデルが同時に失敗モデルも内包してたわけですね。それは欧米が抱え込む非常に深刻な負の価値、マイナスの価値です。まさに天皇の詔勅にもあった、植民地支配と侵略。これは何も確かに日本だけがやったわけじゃなしに、欧米はみんなやったわけですね。その欧米の負の価値をせっせと取り入れて、それを実行したこと。それが失敗モデルの大きな要因であったということは、この第1の玉音放送も認めてるところですね。ですから、ポツダム宣言はもともと欧米が持っている積極的な価値、基本的人権や民主主義も取り入れなさいということをも命じたわけですね。そのポツダム宣言の薬をいわば飲んで、戦後日本、もう一度西洋文明の大枠は守りつつ、いわばリフォームをしたわけですね。そこに欧米の本来持っている肯定的な価値を取り入れることで、戦後の民主化ということになるんですが、それをした結果、またこれもアジアの中ではやっぱり成功モデルでしたよね。成功モデル。1980年代日本は「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と言われる時代があったわけです。だれが見ても、世界のほかのどこの国から見ても、日本はそういう意味で、戦後、つまり戦争で大きな挫折、失敗をした後、突然またリフォームに成功して、もう

一度成功モデルを築いてきたところに、その文明が警告を受けている。西洋文明は、確かに警告を受けているという実感がひしひしとします。西洋文明の大きな構成要員であるアメリカの退潮、最近目覚ましいですね、顕著です。特に西洋文明の本家であるヨーロッパ。欧州の経済危機ということを考えると、いよいよ西洋文明等々、天井に差しかかったな。これからもしかしたら衰退していくのかもしれないという、文字通り西洋文明全体の大きな危機が訪れているのではないかという実感があちこちにあるんです、感じられるんです。こと日本に関して言うと、原子力という点に関して、直接的な警告を受けているという1点で、その警告の中身はより具体的であるといえます。原子力、文明の脈略でいうなら、西洋文明の科学技術の最高度の到達点である、その原子力に日本が今大きく揺さぶられているわけです。

実は日本は66年前、その原子力の反人類性に気づいている、それを表明していますね。詔勅でも表明しているし、政府声明でも表明しています。しかし、広島のとときにその反人類性に気づいていたにもかかわらず、一気に福島に行ってしまった。なぜでしょうか。これをきょう皆さんと一緒に考えていきたいと思うんです。

広島と日本を完全に壊滅した原爆。それから福島で、今日本を大きく破壊しようとしている原子力。どちらも英語で言うと、ニュークリア・パワーズ、核の力。英語ではもうどちらもニュークリア・パワーズだけど、日本では原爆を原子力と言いかえることで、何か別のものであるかのような錯覚に陥ってしまったというのが、大きな日本の戦後の中の検証すべきポイントであることは間違いない。なぜこんなことが起きてしまったのか。原子力というと、皆さんはもう自動的に「平和利用」という言葉がずるずるとついて出てきますね。それから、これは某電力会社のコマーシャルですが、「町に原子の灯がともる」と、非常にほのぼのとしたイメージ。同じ原子の核の力。広島、長崎であれだけの惨状を出現させた、その力がなぜ原子力というふうに名前を呼びかえるだけでほのぼのとしてしまうのか。やっぱり、どこでだれにごまかされてきたのか、考えざるを得ない。

山本義隆さんという方のお名前を挙げたい。現在70を超えた相当お年の方ですが、東京大学で博士課程まで専攻されて、そのときに例の60年代の学園紛争に直面して、彼は東大の全共闘の議長でありました。そんなこともあってでしょう。学問の道は去って、予備校の講師をしておられますが、最近、原子力に関する、あるいは原発事故に関する著作をどんどん出しておられまして、その山本さんが、「私は無免許運転であることを承知の上で、あえて発言する」というふうに言っておられるんです。あの山本さんのような方に無免許運転と言われると、私のような者は一体何というんだらう思うんですが、反面、山本義隆さんの無免許運転という言葉に励まされて、こんな私でも、やっぱり無免許運転をあえてしなければならないという感じを持つのです。これはあたかもゴールド免許を持っている方のような専門家がバスの運転をして、バスの運転をして、ハンドルを回して、「あなたたちは何も知らないんだから、余計なこと言わないでください。大丈夫です。口を挟んでくれなければ、口さえ出さんでくれなければちゃんとやります。黙っていて

ください」ということをずっと言い続けてきたわけですね、このゴールド免許の保持者たちは。ですから、今、私たちがまずはっきり言えることは、ゴールド免許の保持者であるということに任せていた運転が、どうもとんでもないものであったということに、今だれもが気がついた以上は、僕たちも無免許運転を覚悟を固めてものを言う。そのためには、どんどん専門領域にでもずかずか踏み込んで、考えるべきことを考えないといけないという気持ちになりました。今聞いておられる皆様の中にも、本当の意味でのゴールド免許の保持者の方がいらっしやると思いますので、私のような無免許運転者の運転を、じっくりご批判いただければありがたいなと思っております。

まず、原発そのものについて、我々は原子力発電所なんていう難しいものは専門家に任せておきましょう、という考えをどうしても持ちがちでしたね。私もそうだったと反省しています。でも、この原発そのものからして、我々はやっぱり日常感覚の中でしっかりととらえる必要があるように思います。そうしないと、専門家が暴走しかねない、いや暴走したわけです。

あえてもう一度基礎的な話をしますと、原発原発といっても、我々の家庭にあるガスぶろと何ら仕組み、原理変わりませんね。もちろん今のような給湯式型のガスぶろではなくて、以前あったバランス釜のほうがより近いですね。直接釜が水に接して、おふろの水槽の水に直接接した形でお湯を沸かす。ガスぶろは、お湯を沸かして40度ぐらいの適当な温度になったところで我々がたっぷり使って終わりということですが、原発はこのガスぶろで沸かしたお湯を40度にとどめずに100度以上にして沸騰させて、その蒸気でタービンを回して、そのタービンの回転で電力を得ると、それだけの話です。ガスぶろ、空だきをしますね。水がなくなれば空だきが始まります。栓が抜けてしまったという場合が多かったのですが、うっかり、ガスをつけっぱなしで外に出て、その外出が長引くとお湯が空っぽになって空だきが発生する。皆さんもどっちかの形で、何かの形で経験したことがあるんじゃないかと思いますが、今回、福島で起きたことも、もちろんこのガスぶろの空だきと一緒に、原発が空だきを起こしてしまったということです。当然ながら、ガス釜、ガスぶろも事故を起こすという事はあり得ることですね。ですから、ガスぶろの場合は、空だきになったときに火がとまる装置ができましたね。つまり、事故というのはどんな状況を考えても100%ないという事はあり得ないというのが、この人間社会の常識なわけですね。ですから、それが起きたときに、その被害を最小限にとどめておく仕組みをさまざまな機器の中に組み込んでいるわけで、その一般的な形態がフェールセーフ。これが世界の常識ですね。フェール、セーフ=失敗する、安全。これは電車なんかが一番わかりやすい。何か異常が起きたらとめることが一番考えられる想定の中で一番安全な道であるという発想に立っている。ですから、電車のブレーキは圧縮空気で作用しますが、圧縮空気が離れた状態でブレーキが解除される仕組みにしている。というのは、何か故障が起きて圧縮空気が抜けてしまったとき、ブレーキが外れてしまっは大変ですから、圧縮空気が抜けたらブレーキがかかる状態にしております。やっぱり何か事が起きたときはとめるという発想の一番わかりやすいのは、このブレーキだと思いますね。ほ

かにも電車列車は、何か起きたら赤信号を押す。すぐに、かなり広い範囲で信号が赤になるような仕組みにしています。とめてしまいます。その範囲はかなり安全係数をかなり高くとって広い範囲でとめますので、小さな事故でも電車というのは随分大きなものなんか動きますね。僕らも忙しい通勤時間にそれにひっかかると、ぶつぶつ言いたくなるんだけど、やっぱり大きな事故を防ぐためにこういうことは、とめることのマイナスというのは少し我慢しましょうよ。これが常識だと思うんです。ほとんどすべての交通機関はフェールセーフの原則をかたく守っています。唯一例外は航空機です。航空機、エンジンが故障しました。とめました。落ちますね。ですから、航空機はフェールセーフが通用しない唯一の乗り物ではないかと言われてはいますが、皆さん、飛行機に乗るときは、もし事故が起きたらあきらめようという気持ちになっていますね。飛行機会社だって、この飛行機は絶対に落ちませんよって言っているのを聞いたことはありません。ご心配の方は保険に入ってくださいということです。空港の搭乗口に保険、いざとなったら残された家族にということだと思います。みんな承知の上で飛行機に乗っているんです。でも、原発に限ってはなぜか、何をどう言っても、絶対に事故、起きませんと言い続けてきたわけです。飛行機の場合は、落ちるということ。まさか乗る前に、この飛行機は落ちますよ。だから、保険に入ってくださいよと積極的にPRしませんから、事故は起きないんですって聞かれたら、それは保障しかねますと、そう言うでしょうね。ところが、原発に関してだけは、絶対に起きないと言い続けてきて、その保険さえも必要がありませんという、こういう不思議なことを言ってきたんです。

今度の事故で明らかになったんですが、原子力被害賠償法というのがずっとありまして、実は原子力被害賠償法とあるんですけれども、この被害というのは、非常にささやかな被害。つまり今回起きたような深刻な事故はやっぱり起きないことを前提にしているわけです。ですから、各事業所あたりの上限保険金支払い額が1,200億ですね。今度福島は原発が4基つぶれましたから、この法律に基づいて保険金を決めると1,200億掛ける4の4,800億円です。だけど、今度の原発被害で生じる保障額は、最低4兆、場合によっては10兆円になるのではないかとされています。つまり、今までの保険というのは10分の1しかカバーしないわけです。どこまで、なぜ徹底して事故は起きないと言い続けてきたのかということですね。

僕自身、またもう1つの自己紹介になります。私は朝日新聞に随分長いことおりました、1970年代大阪の社会部で仕事をしていました。そのころ、関西電力がどんどん若狭湾に原発を立地していました。私もいろいろな企画で現地には足を運びました。美浜にも行ったし、高浜にも行きました。大飯はまだ建設中ですけど、大飯にも、その近くに足を運びました。それから関電ではありませんが、敦賀の原発にも行って来た。そこで現地の電力会社の担当者とも会って、最後は押し問答。事故はあるんだろうということを何遍聞いても、絶対にないものはないんですと。どうしようもないんです。我々も根負けしてきたというのが正直なところ。まず第1点と、当時のエネルギー事情というのは、これも皆さんもよくご存じのとおり、1970年代というのは、第1次、

第2次石油ショックがあって、特に第1次石油ショックのときには目が覚めたら原油の価格が10倍になっていた。もう。石油には頼れない。その気持ちが非常に現実味を帯びてましたから、これは原発に頼るしかないのかな。でも事故はやっぱりあるんだらうな。当時、気持ちの中では、こんなことを考えていましたね。事故は起きるにしても、百年に一遍か、それとも千年に一遍か、ひょっとしたら1万年に一遍か、どちらにしても、僕はこの世にいないでしょう。その後どうなろうと知ったこっちゃないという気持ちが半分。時間がたてば人類が何とかこの問題を解決するときに来るかもしれない。私はその前にこの世から去らせていただきます。こんなことを考えていたように思います。

ところが、日本に原発が本格的に導入されるようになってから、わずか40年でこの事故が起きた。石原慎太郎さん、東京都知事の石原さんが「天罰」という言葉を使った。これはその被災者に対して余りにも思いやりのない言葉だと思いましたが、3分の1ぐらいわかるところがある。その「天の罰」を「天の声」としたら、天というのはそんなに甘いもやおまへんでいう重大な警告を、まさに天が発してくれたのです。原発事故だったら40年に一遍だって起こるんだということですね。何、おまえたちはのんきに。それが100年、200年、300年、400年ないのだと思っていたのかということでしょうね。「天の声」ということで理解するならば、石原さんの言う事もわかります。

まず、原発について。こういうことは、原発というのはただのガスぶろ釜であると。しかも、実際、やっぱり欠陥が多いよ。いつ水漏れが起こすか知らない。水漏れが起きて、空だきが起きたときに、何でこんなことになってしまうのかということなんですね。ここから先は、実は原子力ということについて、最低限の知識を持ってないとその恐ろしさがわからないでしょうね。ですから、これも私自身がいろはから勉強したことをここであえて披露させていただきます。

これは原子力というのは、本当に素粒子と言われる世界についての日常感覚がないと、やっぱり私、何も知りませんよということになってしまいます。そういうことが今度の多くの人々の無関心を生み、すべてが専門家任せになり、それが今度の事故の原因になっているとするならば、やっぱり多くの人、できればすべての人が素粒子というものを、自分の日常感覚でつかむ、そういう作業をまずしなければいけない、私自身も含めて、それは自覚しないといけないと思うので。

素粒子というのは、今から137億年前に宇宙ができたときのビッグバン、これは皆さんもどっかで聞いておられますね。何か突然大爆発が起きて今の宇宙ができたのですが、まさにその137億年前のビッグバンの世界に直接かかわる話だということは、まずそのスタート地点で申し上げたい。この素粒子論というものをうんと身近に感じさせるニュースが去年の9月以降相次ぎましたね。ふだんだったら、余りそういう自然科学の記事というのは大きく取り扱われないんだけど、2つの記事は新聞の、一般の新聞の1面トップに大きく載りました。1つは、皆さんご記憶の、ニュートリノです。ニュートリノという素粒子。素粒子というのは、原子核、我々のいろんなものをつくる最小単位の粒々。「粒という表現を使うな」というふうに言われるんですけど、素粒子と

書いてあるんだから、粒としか言いようがない。粒々の1つであるニュートリノという物質が、どうも光より速く飛んでいるんじゃないかという観測結果が出たというんですね。世界じゅうを仰天させました。何でそんなに仰天させられるのかというと、世の中に光より速いものはないということが、この世界を考える上の大前提になっている。これが有名な相対論ですね。もしこの光より速いものがあるとすると、観測者から見て、その光より速く飛ぶものが、そこでは時計が逆回りしてしまうという。そんなことはあり得ないという意味もあって、光より速いものはないということが、今この世界、宇宙の成り立ちを考えるときの前提であったわけですが、それを覆すことになったらどうしようかというんで大騒ぎになったんですが、多分、これは間違いだった、観測の間違いだということになって、みんなほっとしています。

次の話題はヒッグス粒子。これが、今まで理論的には予言されてきたけど、どうも初めて観測されたようだぞということで、非常に大きなニュースになりました。137億年前にビッグバンでできたとき、宇宙はどんな状態かということ、この今、我々がイメージしている宇宙とは全く別で、ほとんど重さのない素粒子、粒々が光の速さでめったやたらに飛びまくっていた。そういう世界であったようです。それがなぜ今、我々がここに存在しているような宇宙になったかということで、一番大事な役割を果たしたのがヒッグス粒子というもんだというふうに言われてました。それは、光の速さで飛び回っている粒子、素粒子を、「水あめのように」という表現を模してくれる人がいますね。水あめのように固めて、要するに飛んでいたものを固めた。そこで質量、重さができる。宇宙、世界に誕生したという考え方です。光の速さが閉じ込められて重さになったとは、ちょっと実感としてわかりにくいですね。速さが重さになる。ここを何とか我々の生活実感で解決できないかなというふうに思う物理学者が多くて、私たちにもわかりやすく、いろいろな本で説明してくれている。ここに力という概念を入れると割とわかりやすい。速さ=力=質量、重さですね。速さが力であるというのは、確かに私たち実感できます。自動車がぶつかってきたとき、その自動車の重さが、例えば、5トンの自動車がぶつかったとき、10トンの自動車がぶつかったとき、その受ける力は2倍になりますが、その自動車、同じ自動車が時速20キロでぶつかったときと、時速40キロでぶつかったとき、それは2倍の力が加わるんでなしに、2倍のまた二乗、4倍の力になるということは私たちも生活で実感していますね。スピードが速いものというのは、物すごい力を持つてる。それは重さよりもずっとスピードのほうが力になる。体重250キロのお相撲さんが、ゆっくりのしのしぶつかつてくるときよりも、100キロの小兵の力士がばんとぶつかったほうがずっとエネルギーを強く感じるというのは我々も実感しますね。力は同時に、重さである、質量であるというのは、これはちょっと実感しにくい部分がある。私もちょっと恐妻家です。うちのかみさんのしりによく敷かれて、そのしりの重さって力だな。重さ、重いものって、確かにプレッシャーになりますね。だから、重さ、質量は力であるということは、これは割と実感しやすいので、光の速さが質量であるということはこういうふうに考えていくと、案外わかりやすいのかな。そんなに素粒子の世界で起きていることは、絶対に我々の理解できる

ところではないんだというふうに思うことはないわけですね。ですから、重さ、つまり一番物質でいくには重さ。物質はすべてである。重さとして考えるのが、我々の日常生活、日常感覚が一番とらえやすい。それが同時に力でもあり速さでもあるというふうに考えると、だんだん原子核の力というものが我々の理解の中に入ってきやすいのではないか。

原子の核の持つ重さをぶっ壊すと、それが力として放出される。これは割とわかりやすい考え方です。原子の核を利用する。取り出して利用するということに、物理学者が考えたことを非常に平たく言うところのことだと思います。物質を構成している質量、重さというのは、その源は光の速さであり、それは同時に力であり、ですから、質量を、重さをぶっ壊してしまうと、破壊してしまえば、それが力を取り出せる。その力というのは、速さというよりも、光の速さであるから、これはべらぼうなものである。ということに1人類が気づいた20世紀初頭からまだ100年しかたっていないんです。そのころの物理学者、アインシュタインを初めとして、そういうことに気がついたわけです。

さっきの話にもう一遍戻ってみますと、せっかくヒッグス粒子という粒子が、光の速さで飛び回った素粒子をとじ込めてくれたわけですね、原子核の中に。それがほぼ130億年前。そこまでさかのぼって、人間が人間によって、その原子核の結合、水あめのようにどろどろと固まって、原子核の結合をぶち壊すことによって巨大なエネルギーを取り出すということに気がついてしまった。これは大変なことだということをちょっと実感したほうがいいと思うんです。130億年前の世界に、無秩序状態に宇宙を戻すようなことを人間がしてしまったということです。しかも、膨大なエネルギーが出る、その核分裂はいちど始まると、核崩壊という形で、いつまでもいつまでも分裂が終わった後、もうこの核はばらばらに熱し続ける。原発の中で電力を起こしている核の反応は核分裂ですが、事故後の今、起きている炉心溶融は、つまり核崩壊。分裂を続けた後も、なお核物質は崩壊を続けて熱を発生し続ける。今、その温度は恐らく2,000度とか、3,000度とか、すごい高い熱を発生し続けている。いつまで熱を発生し続けるかといえば、恐らく何万年先まで何らかの温度を発生し続けるだろうということです。そういうものをお釜で炊いてお湯を沸かしてたわけです。その水が全部抜けてしまいました。その物質は今も高い温度で熱を発生し続けています。放射能を発生し続けています。手が出せないから右往左往してるんですね。これが福島で起きている現状です。

世の中の今までの、核を別にした営みというのは、基本的にものを燃やしてました。これは分子レベルでの化学反応。つまり、原子がより集まってできた、通常我々が物質として保存できる分子がくっついたり離れたり。つまりCがO<sub>2</sub>とくっついてCO<sub>2</sub>になって燃える。その熱を使って、我々はエネルギーを得ていたわけですが、それに飽き足らず原子核にまで手を突っ込む。137億年前の宇宙の成り立ちのところまで手を突っ込んでしまったことが本当に人類としてよかったのだろうか、ということは天罰という言葉は不謹慎だとしても、もう一度これを考え直す重大な契機が今来ているんだなという気がします。実は66年前の日本は、直感的に、「こんな

ことはしちやいけなかったんですよ」というふうに感じていたはずですね。ですから原爆の非人道性を国際社会に訴えてきたわけです。この辺の考え方を高木仁三郎さんという方、もうお亡くなりになりましたが、非常に有名な原子力問題の研究者で、反原発の立場でしたけれども、原発推進の方たちからも尊敬されていた。その方が言っています。「日常世界のエネルギーは化学的結合から生まれる。私たちの住む世界は原子核の安定の上に存在しているが、核エネルギーは原子核の安定を強いて破壊する。人間世界にとって非和解放的なものである」。非和解放的という表現をしています。恐らく66年前の日本人も原子爆弾を投下されて、そのことに直感的に気づいていたと思います。

少しばかり、この原爆がなぜ原発になってしまったのかという、その経過をもう一度たどってみます。

人類が最初に原爆を成功させたのは1945年7月16日、アメリカのニューメキシコ州の砂漠の中であったんです。26日にポツダム宣言で、その使用を日本に警告し、8月6日に広島、8月9日に長崎に落とした。このときに日本はこの使用に対して抗議をしていたはずですが、それがどうなったのか。アメリカは、この原子のニュークリア・パワー、核の力を広島、長崎で実験してみて、これは幾ら何でもちょっと兵器に使うには余りにも制約が多い。そんなに使えるものではないと痛感したはずですが、だけど、一遍手に入れた力を人間というのは手放さないんです。何とか使わないかん。それならば、同じパワーを、パワーと普通英語で言うと、大体限定がないと電力を意味します。パワー、つまり電力に使ったらいいやないかというふう考えたのが、アメリカ。1953年有名なアイゼンハワー国連演説です。「アトムス・フォア・ピース」、平和のための核、原子。これから世界じゅう、アメリカを先頭に原子力を平和利用のために開発しましょう。具体的には電力を使うということですね。日本、その2年後です。1955年に原子力基本法というのを制定して、平和の目的のためにという条件をつけた上で、原子力の研究開発利用を積極的に進めていくという法律をつくりました。原子力を非人道的なものだと考えたときからたった10年ほどで、方向転換してしまった。なぜこうなったのかということは、もちろん検証しないといけないと思うんですが、この原子力というものが日本の社会、あるいは日本の伝統的なある種の人生観の中にうまく受け入れられるものなのかどうかということもあわせて考えてみたいと思うんです。たびたび繰り返すように、我々はこれまで西洋文化の中にどっぷりとつかってきた。西洋文明化を取り入れて欧米化を進めてきて、それが挫折の時期もあったけど、基本的には成功してきたと思っているわけですね。近代国家、資本主義、科学技術、その3要素に加えて、そのベースにあるのはやっぱりキリスト教だと思います。キリスト教、ユダヤ教、あるいはイスラム教、同じ神を信じる、一神教といわれます。

これから申し上げることは、皆さん、いろいろな宗教をご信仰だと思います。ですから、心の中の信仰の中身に立ち入るものではなくて、あくまでも文化論、文明論としての言い方だというふうにご理解いただきたいんですが、特にキリスト教の場合、自然の制圧という意識が非常に強

い。創世記、もちろん創世記はキリスト教だけのものではないんですが、初めに神が、まさに光をつくったわけです。これは物理の認識と合致します。そこから天地を分け、陸、海をつくり、草木をつくり、動物をつくって、最後に人間をつくるわけですね。その人間に対して神はこう言うわけです。「地を従わせよ。地に動くすべての生き物を治めよ」。つまり人間は地を従わせなければいけないのだ、生きているものを治めなければいけないのだという意味。ですから、自然は使ってもいいのだ。むしろ自然の持つ力を積極的に利用することは、場合によっては人間が神から課せられた責務であるという考えさえあると思います。

最初原爆製造にかかわったという責任者、原爆の父ともいわれますオッペンハイマーが言っています。自然界をコントロールし、可能な限り大きな力を目いっぱい人類に引き渡すのはいいことである、と。ほとんど手放しで礼賛しています。考え方の基盤に、「地を従わせよ」という思想が濃く伺われるように思うんです。

日本はどうでしょうか。日本というのは、仏教、神道の国だとは必ずしも考えませんが、アニミズムの思想的風土が非常に強いと思います。自然の営み、生態系ですね。高木仁三郎さんの言葉を借りるならば、分子結合に基づく安定した原子核の上に成り立った、分子結合に基づく生態系。生態系というのは風のそよぎでもあるし、海の潮でもあるし、生命の呼吸、それから炭酸同化作用、そういう自然の営みのサイクル、生態系です。これに素直に従い、ある種の恐れを抱き、共存していくという発想のほうが、そういった自然を従わせるという考え方よりも強いのではないかと思います。もちろん、我々が通常接する自然の中に太陽というものがあります。太陽というのは、あれは核反応をあの中で起こしています。核融合という名前の核反応を起こして、あれは生態系に大きな影響を与えてはいますが、あれ自体は地球上の生態系とはやや異質ですね。

そこで中沢新一さんという宗教学者がとてもおもしろいことを言っている。「一神教というのは、古来人類は、道具の発見段階ではやっぱり生態系を重んずるアニミズムに居して暮らしを営んでいた人類であったんだけど、そこに突然太陽が登場させたのが一神教である」と。「この場合の太陽というのは、その中に核反応を起こしていて、本来の生態系のあり方とは異質なものであるという意味が含有されていますが、それが一神教である」とも。原子力はまさに一神教の技術であるというふうに言われている。

この考え方を借るならば、ポツダム宣言というのは、西洋文明、これが一神教をベースにすることであるならば、その一神教とともに、核を日本に持ち込んだ。アニミズムの世界の日本にその核を持ち込んできたと。当初日本がそれに対して何がしかの抵抗感を示したのは、やっぱり伝統の中に異質のものが入ってくるという実感を本当に持ったと思うんです。それがいつの間にか日本社会に組み込まれてしまったという理解をしてもいいのかなと思っています。

そこで、今度起きたことです。3.11とは、地震と津波の複合的な災害が原発を押しつぶしてしまっただけです。地震と津波というのは、まさしく科学的結合に依拠する生態系エネルギーそのものです。原発が一神教エネルギーであるとするならば、中沢さんの言葉を借るならば、もしかし

たらアニミズムが一神教に復讐をしたという考えができるのかもしれませんが。でも、ここでもう一つ考えていいと思うんです。生態系エネルギーというもののすさまじさですね。これは原子核の持つエネルギーがすさまじい以上にすさまじいのかかもしれません。広島型原爆の持つエネルギーは、標準的な台風1つの持つエネルギーの100分の1のエネルギー量になります。言い換えれば、原爆の100倍のエネルギーを持つ自然の力というのはすさまじいもんだ、と感じてもいいんじゃないか。

例えば、地震というのは、そのベースになるのはマグマ。地下にあるマグマの運動ですから、このマグマの力をお借りすれば、地熱発電ということが可能なわけです。今、日本の地熱の持つエネルギー量は2,300万kW/hだといわれております。優に原発23基分ですね。あの津波を起こした海の水の流れ、潮流、潮汐、波動でもいい。これもすごいものになるはずですよ。

今、日本で自然エネルギーといいますと、何しろ電力供給量の1%にしかならない、どうも頼りない。こんなものに頼れるのかと考えられがち。これは第1回の講演で竹内さんが指摘したように、ドイツでは、20%のレベルまで開発してる。でも、自然の持つ、生態系の持つエネルギーの強さを見ると、これは十分に実用化可能だと考えたほうがいいかもしれません。それから、私たち日本人の本来の体質と原子力よりはずっと波長が合うのではないかと。そんなふうを考えてもいいんじゃないかと思うんです。

宮城県の気仙沼でカキの養殖を営んでおられる畠山重篤という方がおられて、この方は国連森林フォーラムという国連機関の国際森林ヒーローということに去年白羽の矢が立ちました。国際森林ヒーローというのは、去年がたまたま2011年国連の森林年、国際森林年ということだったので、その1つのイベントとしてそういうものをした。そこに選ばれた畠山さん、まさに被災地のど真ん中でカキを養殖して、なぜこの方がヒーローに選ばれたかということ、ただ単にカキをつくるだけでなしに、「豊かなカキを育てるためには当然豊かな海が必要で、そのためには、その豊かな海に豊富な栄養分を流し込む陸の森が必要である」ということで、カキだけでなく森林の涵養をせよとする。まさに生態サイクルを尊重するという、そういう立場の申し子のような方です。その方が新聞でこういうことを言っておられます。被災地の人に対して、「これだけ海に痛めつけられていて、海を恨んでいる人は1人もいない」。具体的な主張としては、今、これだけの津波が来たからには、この津波を防ぐためのもっともっと高い防潮堤をつくらなければいけないということで、今、国家予算、かなりそちらのほうに進もうとしています。新聞報道でもありましたように、現地の方たちが割と反対するんですね。何か牢獄の塀の内側にあるようだとか、海が見えなくなる、我々は海を見たいんだという気持ちもあります。そういう気持ちを代弁して、こんなふうに言ってますね。「どう立ち向かうかというより」、つまり自然にですね。「海山とどうやってうまくつき合っていくかが、そのほうが、ずっと重要である」と。「海や山をおそれちゃいけない。つき合っていくことができる」、この辺に自然エネルギーの開拓という部分、そこに道を開く1つのヒントがあるように思うんです。

私は、前は原発はやむを得ないと思っていたと告白したつもりですが、今は、やっぱりもう原発とはすっきり手を切るべきだと。皆さんの中にも、もちろん原発は必要だというご意見をお持ちの方、たくさんいらっしゃると思います。私はもう原発とは手を切ったほうが良いという立場ですが、その場合でも自然エネルギーにどういう将来図を考えるべきなのかということは、私も無免許運転なりに示さなければいけないと思うんですね。

1つは、やっぱり自然エネルギーというのは地産地消型、地元でつくって地元で消費する。これがベースになると思いますね。自然というのは、もともとその土地のものであります。関電管内の実情を見ましても、美浜、高浜、大飯、人口たった合わせて2万6,000なんですね。関電管内の人口の恐らく1,000分の1だと思います。その地域が関電全体の電力量の半分を供給しているというのが、やっぱりおかしいんじゃないかなというふうに考えるのが、自然ではないか。

それから、自然エネルギーを使っていくためには、自然エネルギーというのは不安定であると認めないといけない。太陽が陰ったら太陽発電はできません。風がとまったら風車はとまります。そこで当然必要とされるのは、やっぱりネットワーク型社会というもの。具体的にはネットワーク型の自然エネルギー供給体制ができないといけない。その意味でも、地域独占型の現状というのは、これから先はやっぱりやっていけないんじゃないかなというのが、私の素直な感じです。実は、つい最近まで私は電力自由化はまずいんじゃないかと思っていたんです。これはアメリカで、ちょうど20世紀から21世紀に変わるそのころ、ロサンゼルスやニューヨークでとんでもない大停電が次から次へと起きた。その大きな原因は急速に進んだ、急ピッチで進んだ電力自由化じゃないかと言われました。つまり、電力供給、あるいは送配電が金もうけの対象、投資の対象になってしまっている。もうかるときはどんどんやるけど、もうからないと手を引いてしまうという現象が起きて、こんなことがあるぐらいなら、弊害はあっても地域独占は仕方がないんじゃないかというふうについて最近まで思っていました。が、この地域独占型の、東京電力で結局電力供給が危機になるならば、もうこれはさっさと地域独占から手を引くべきだというのが私、実は偉そうに言うけど、つい最近意見を変えて、転向した、改宗と言ったらいいのかな。正直に言うとしてそういうことです。

そこで、モデルはいろいろあります。1つはヨーロッパモデル。これはまだ実現してるわけではないんですけど、(配布の新聞記事にあるような)こういうネットワークをつくらうという機運が急速に高まっておりまして、既に、もう着工、実現しているところも一部にあります。まだ一部ですけどね。ごらんになっていただいたらわかりますけど、北はノルウェー、スコットランドから南は北アフリカの砂漠地帯まで全部結んだら何キロになるのか。それぞれの地域の特性に応じたエネルギーをまず地産ですね。地域でつくりましょう。この計画の根幹になったのは、どうもスコットランドのようですね。スコットランドは、行かれた方もあるかと思いますが、風が非常に強い。潮力もある。ですから、この風と潮力の発電所たくさんできていて、どうも自分のところで地産地消の消費量の倍ほどの生産量があるそうです。だから、つくったものの半分は余

って、それを何とかビジネスにしたいというんですね。前からそれを思っているところに、イギリス、デンマークの例でスーパーグリッド。やっぱり、これお互いに自然エネルギー、いろいろ発電は心もとなくなってきたとき融通し合いましょうよということで、今、スーパーグリッドと呼ばれる、グリッドというのは送電網なんですね、をつくっていきましょう。その計画におとし合意したということです。日本円にして3兆円余りの予算をつぎ込んで、これはもう着々進み、軌道に乗ろうとしているところだという。この場合、頼りにされているのは、ノルウェー。フィヨルドとか、滝の高さの光景は皆さん見られた方もあると思いますが、つまり水力が豊富なんですね。水力発電は非常に潤沢で、欧州のバッテリーとか言われている。イギリスやデンマークがもらえばなしだけじゃなくて、当然ノルウェーの電力が危なくなったら、もちろん供給する体制があるんです。これに恐らく刺激されたんだと思うんです。ドイツですね。ドイツは何しろ、もうあと10年で原発全部なくすと言ってるわけですから、自然エネルギーはそれこそもうしゃかりきになってやっている。デザーテックという計画で、ドイツはまだ計画の段階ですが、ちょっとふろしきはたくさん広げています。ふろしきを大きく広げて、アフリカまで伸ばす。北のほうは風が強い。南の砂漠には、太陽光は幾らでもある。土面に太陽光パネルをたくさん並べて、もし大雨が降ったり、雪が降ったり、風が吹いたりして太陽光発電が働かないときもある。そのときは北の風力発電で補うことは恐らくできるであろうと。地産地消に立った電力の融通ということで、最終的に完成すれば、恐らくヨーロッパは自然エネルギーだけでかなりのものが賄われるんじゃないかということになりつつあるようですね。

ヨーロッパというのは、西洋文明の老家なんですけど、その西洋文明がかなりちょっとしんどくなってきて、ヨーロッパはもうへとへとですね。ですから、そのへとへのヨーロッパを何とかしゃきっとさせようということで、欧州統合の事業が進んでるんです。その欧州統合の事業がうまくいかない部分があって、それが今度の欧州通貨危機につながっているわけです。でも、欧州統合の道は、これも成功、失敗、成功、失敗の道をたどった上で、やっぱり最後は成功の道を進んでいると私は確信しています。ヨーロッパは、近代国家という枠組みでやっていたのでは、もうもうもちませんよ。だから、近代国家という、いわゆる近代、従来型の西洋文明は乗り越えて、新しい文明をつくらなければいけないということにかなり自覚的です。

日本はちょっと違ったアプローチになりますけどね。このところ、どういうふうに言うかは、これはいろんな人がいろんなことをこれから言ってくると思いますけど、今、私がちょっとしゃべったことから敷衍させるならば、日本的アニミズムに立った自然への恐れ、自然崇拜、自然を大切にするという意味で、自然を支配するということに思想的なウエートが置かれている西洋文明からの脱却に進んでいく道もあるのかなと感じますね。日本が直面する問題、それこそ今、大飯原発を再稼働させるかどうかという。どこまで原発に頼っていくのか。あるいはどこまで大胆に原発と手を切っていくのか。これは非常に具体的な政策選択として大きな分かれ道になりますね。今、その重大な時期が確かに迫っております。

さあどうするのかということになると、これはでも私の個人的な、全く個人的な意見ですが、やっぱり悪女、たちの悪い相手とは手を切るときは早く手を切るべきだと。見切りを。やっぱりずるずるとつながっているから、いつまでも絶ち切れないわけですね、いろんな意味でね。それとはどうもうまくやっていけませんよ、だけど当面飯食っていかないといけないから、あと10年、20年はつき合いますという言い方よりも、新しい人間と手を結びなさいと。このほうがずっと前向きだと思います。ですから、私は今の政権だって、やっぱりいろいろな人のことを、立場を考えているわけだから、私のような一国民がほんとに簡単にものを言うような立場にないことはよくわかるんですが、でもやっぱり私は、早く手を切るものとは手を切って、新しい相手を見つけましょう。そのほうがずっと前向きだし、日本人とそもそも合っているんだと。今まで手をつないでいた相手が、本当は最初から気が合わなかったんだよということを早く悟ったほうがいいように思うんです。

最後に申し上げたいことです。近代あるいは西洋文明と別れを告げなければいけないときが来るのかもしれない。中世の古い世界が近代に移るとき、大きな役目を果たしたのが啓蒙思想というんですね。啓蒙。啓蒙思想というのは、つまりみんなが賢くなりましょうということだと思います。教会とか、王侯貴族が独占していた知識、知恵というものを一般民衆も共有することで新しい時代が開ける。日本でこのことを一番わかりやすく言ってくれた人が、福沢諭吉のまさに「学問のすすめ」ですね。みんなが学問をしましょう。みんなが賢くなりましょう。それが近代化の上、日本が欧米の一員になる上でも必要なことですよという点で目標を持つ、果たした力というのは非常に大きいと思うんですが、1つの負の側面として、事態が進展するに従って、専門化、細分化がその延長で進んで、いつの間にか専門家にお任せする風土ができてしまった。その失敗の一番わかりやすい例が、今度の福島原発だったと思いますので、私は皆様に、本当にまじめな意味で、まじめな気持ちで呼び掛けたいのは、「無免許運転のすすめ」ですね。山本義隆さんでさえ無免許運転を宣言した。我々はみんな、少しでも多くの人が無免許運転をしていく。これは正しいことだし、必要なことだと思うわけです。ですから、最後のこのお話としては、無免許運転を皆さんにお勧めしたいということで、きょうの話を終えます。

○会場 今、日本の世論、今、原発、いわゆる脱原発か、このまままた原発を今までどおり進めていくかという世論がかなりわき上がってくると思うんですけども、私も今先生と同じように、やっぱり脱原発の方向というのは、私個人には重く考えておるんですけど、実際にそういうことを決めるのに、さっき学問のすすめというお話があったんですが、大半の人々、私も含めて、実際無免許の状態ですら脱原発か、原発を進めるかというのが全然ほとんど無免許どころか知らないんですね。ただ、もう自分の、いわゆる、「ええんとちゃうか」というような、そういうイメージだけでこれから自分の未来を、自分というか、子どもたちの未来を決めていくような状態なんで、実際もっと実態はどうなんやというのを広く知らしめる状況というのが必要なんじゃないかなと思います。これが1つ。

あともう一つ、私も今、脱原発で自然再生エネルギー利用して、できれば、先ほど日本1%しかないということですけども、これがもう99%ぐらいになってほしいんですけども、それをするためには、どうしたらいいかという、先生の構想、ちょっと聞かせていただけないですか。以上です。

○中川 実情、つまり原子力とか原発について、我々は本当に何も知らされてこなかったわけですよ。それで知らされてこないのに、我々はそのことに反論、実は私のような新聞社に勤めていた人間でさえも目をつぶってきてしまったのは、仕方がないなという気持ちがとても強かったと思いますね。だけど、原発を進めてきた、いわゆる原子力村の人たちは、そういう状態ができることもある部分で期待していて、結局、おまえたちにはわからないのだよと、何しろ事は素粒子の世界の出来事なんだから、あなたたちにもものを言っても始まらないでしょう。分からないでしょう。だから、どうぞ私たちに任せておいてくださいというふうに世論が進んでしまったわけですね。だけど、やっぱり我々が、一人一人が何か素粒子とか、原発の基本的な仕組みについて、ちょっとものがわかってるなというふうにあの人たちが感じたときに、政治権力なり、あるいは電力会社の姿勢は必ず変わると思いますね。

つまり、啓蒙の時代にどういうことが起きていたのかということをもう一度、振り返ってみますと、ナポレオンという人がいましたね。彼はヨーロッパじゅうを侵略して回ったんですが、エジプトに遠征したときに、とにかくナポレオンは猛烈な読書家で、馬の上でも本を読んでいた、その本を読んだらページを破って部下のほうにほうり投げて、部下はそれを競い合って拾って読んでいたと。つまり、あの時代は知識というものに対して、全民衆が飢えて、みんなが知識をむさぼるように獲得していたという実態があるようです。ですから、これを我々の身に置きかえて言うと、結局言うことは多分無免許運転のすすめになってしまうんですが、専門的な知識を恐れるな。どんな難しいことでも、我々の実感で理解できる部分があるはずなんだと。あるところから先は行けない部分、これも意外にありますね。だけど、行けるところまで行くという、つまりまさに国民の意識が政治権力まで、彼らはこんなに原子力、原発のことについて熱意を持っているんだということが伝わったときに、やっぱり立ちどまらざるを得なくなりますね。

最近の世論調査でも、再稼働反対57%もあるわけですね。賛成27%の倍以上も上回っています。去年あたりの世論調査を見ますと、むしろ去年の6月、7月あたりの世論調査では、再稼働反対派のほうが賛成派より少ないんですね。恐らく当局者、原発を進めようとしている人たちは、時間がたちや忘れるだろうという気持ちがあったと思いますが、彼らの思惑とは逆の方向に物事が進みますね。むしろ、再稼働に反対するという考え方のほうがどんどんふえている。これは恐らく推進しようとする人たちから見たら、全部意外な展開だというふうに思っているところがありますね。ですから、原発を再稼働させようと考えている人たちがいるならば、その人たちに、我々がここまで勉強して、原発のことだったら、このぐらい、この程度のことならばわかるんですよということを実感させる、さまざまなルートでのアピールが必要になってくると思いますね。

新聞の投書欄を見ても、随分立派な、説得力のある意見が一般読者という立場の方から出されています。そういうのを見ていけば、簡単に今の原発再稼働に今の野田政権が向くとはちょっと思いがたい部分もあるんですね。

自然エネルギーについて、何分、本当に日本は、今まで余りにもそれに対して無関心過ぎただけで、逆に言うと、日本ほど自然の力に恵まれている国はない。例えば、降水量1つとってみます。雨というのは重大な自然エネルギーの源です。日本の年間降雨量は大体平均1,700ミリといわれていますね。地球上の降雨量の平均が900ミリぐらいといわれています。つまり、日本は地球の平均から見ても、倍に近い水が天から降ってきているわけです。それが川の流れにもなるでしょう。いろんな形で、そのこと自体がめぐりめぐって大河にもなったりするでしょうね。ポテンシャルという意味では、水も大変なエネルギーを含んでいるし、地熱、さっきも言いましたが、原発23基分に優に匹敵する地熱があります。もちろん、自然エネルギーというの、それを利用するという事は自然に負荷を与えますね。例えば、潮汐、潮の満ち干を利用して発電を起こすことをとことん考えていくと、これは地球の重力にも影響が及んできて、ひょっとしたら月が落ちてくるかもしれないという、そういうシミュレーションもあるそうで、自然エネルギーだからといって、むやみやたらにももちろん使えるものではないということも含めた上で、日本は余りにも今まで、これだけ恵まれた自然のエネルギーを無駄にしてきたという言い方をしているんでしょうかね。それとうまくつき合うことを全くせずに、原発だけに依拠してきた。2010年の政府の電力計画ですと、あと20年後にはこれを50%にまでふやそうというふうにまで考えていた。その前に、まさに「天の声」がかかった。「天」というのは、ある意味で自然だと考えてもいいですね。ですから、その自然が、「私とうまくつき合ったらどうですか」というささやきをしてきたというふうに考えてもいいかもしれません。あんまり技術的な話に踏み込むだけの資格はないんですが、国民の間に自然エネルギーを推進すべきだと。これは、ちっとも絵そらごとではないんだと。日本はこれほど自然のエネルギーに恵まれた国なんだという認識が広まれば広まるほど、政治もそれに答えざるを得なくなってくると考えています。

○会場 3回続けてお話聞かせていただきました。非常に、私どもに興味のあるテーマだったんで、勉強になりました。

その中で、今、さきご質問されたものにもちょっと関係するんですけども、やはり我々は原子力、こだけ大変なんだというような思いをしたと。もっともっと原子力は安いと言われてたものが大変なんですね。1回事を起こすと、大変な犠牲と、プラス大変なお金がかかると。こういった大問題が明らかになったんですね。こういった中で、やはり脱原発という方向に進んでいくのも当然のことやと私は今思っているんです。

それで、今までの施策を見ていると、やはり日本の電力は原発を中心に、火力、そういったものでちゃんと賄われてきたから、逆にその自然エネルギーに対して極めて冷たい態度をとってきたというのは、これが現実であります。風力に関しては、ほとんど補助金が出ない。太陽

光は出ていましたけど、だんだん減っていったら。大きなものは余りできないのでという状態のもとで、やはり実際ブレーキがかかっていたもんで、いろんなアイデアはありますし、いろんなやり方はあります。

例えば、風力なんかやろうとしたら、風の吹くところは海側なんで、日本は海側は残念なことに国立公園とか国有林になっているところが非常にたくさんなんです。そうすると、そこに風力発電所、風車立てられないというようなことがあって、なかなか、それは立てさせないという意図があったからかと思えますけれどね。じゃ、海に立てたらいいじゃないかと。じゃあ海は日本は遠浅じゃないからヨーロッパみたいに海に簡単に立てられないといったような、何かもう反対の意見がいっぱい出てきて、実際はそうじゃなしにやろうとしたら何ほどもやれる方法がある。

だから、先ほど言われてた質問に対する1つの答えとしてはね、エネルギー源は非常にあるんだから、どうすればいいかというんです。技術的な対応で、かなりのことができるということをはひとつ言っておきたい。

それと2つ目は、やはり我々が一般の人がやっぱり覚悟しなければいけないのは、原発も物すごい金がかかるというのはわかりましたけれども、その自然エネルギーも、やはり今の段階ではかなり金がかかる。ヨーロッパで太陽光とか、風力がスペインなんかでどんどん使われたしたのは、あれはすごくいい値段で買ってもらえるという形があったからそうだったわけですね。ところが、最近ちょっとスペインの太陽光がちょっとおかしくなってきた。だから、それはやっぱり電気を使う人らが、自分たちもある程度覚悟しなければ。そら、ここにおられる方が、やっぱりいいものを使うためには何か自分たちもせないかんというんです。そういう覚悟をやっぱり個人個人、企業もも含めて、みんながそういうことを、それでもいいんだという心を持たない限りね、進んでいかないんじゃないかなと思います。ぜひそういうなんは、我々なかなかそういうふうに興味はできないんだけど、そういう気持ちやっぱり持つべきだというのは大事だと思います。以上です。

○中川 教えていただくことばかりで、かえって頭が下がるんですが、本当におっしゃるとおりだと思うんですね。

風力、地熱というのは、具体的に考えた場合でもそうですが、どちらも国有林とか、あるいは国立公園に大体ひっかかることが多い。地熱が特にそうですね。ですから、ここで、ある程度日本はひとつのトレードオフを迫られているということだと思うんですね。どっかでやっぱり国有林ないしは国立公園というものこれまで守られていた自然環境というのをある程度阻害する必要がどうしてもくるかもしれない。しかし、それは原発とずっとつき合っていかなければならぬリスクと比べてどちらを取るべきなのかという判断をしないとイケないかもしれませんね。その場合、先ほどご指摘のように、どうも今まで事を進めないために、いろいろ規制が何だかんだということを持ち出していたとするならば、その力はやっぱり除去する必要があると思います。しかし、あるところでは、本当に環境を、つまり我々が環境を重んずるがゆえに原発を排除する

と言いながら、環境を何らかの形で損なわなければならないときが来たときに、どちらを選ぶのかということを選択しないといけないときが来るかもしれませんね。

だから、太陽熱発電にしても、まことにおっしゃるとおりで、日本はたしか10年ほど前までは補助金があったんだけど、一度それを切ったんですね。その後、ドイツが急速に太陽熱発電に力を入れるようになって、メーカー、供給サイドからもドイツのつくる太陽熱パネルがヨーロッパじゅうを席卷してしまったと。もし、日本があのまま補助金制度を維持して、太陽光発電の、あるいは太陽熱発電の普及を続けていけば、日本のつくる太陽パネルがヨーロッパにだって売っていたかもしれない。随分立ちおくれをしてしまったわけですね。何でせつかく太陽熱発電を一環政策として推進する決定をしたのにやめてしまったのか。もしかしたら、本当に電力会社の圧力のようなものがあったのかどうか。何か不純なものがあったかもしれませんね。とにかく、随分この間、我々は時間を無駄にしてしまったとことがあります。急速にそれを取り戻すとき、今まさにそのときだと思うんですよ。我々にもある程度の覚悟が求められている。つまり消費者にも覚悟が求められている。消費者というのは、全国民ということになりますが。そのためには、やっぱり一人一人がこの事態に積極的にかかわるといふ姿勢を持たなければいけないということが明白だと思うんですね。もう任せておける人はどこにもいない。みんなでかかわっていかなければ時代は本当にもう来ないということを経験しなければいけないと思いますね。これは私自身もそう思ってます、痛感します。

○会場 えらい幼稚な質問なんですけども、今回、地震と津波と一緒にになりましたですね。あれどっちにウエートが、原子力に対する、かかっているんでしょう。

○中川 素朴な質問というのは非常に大事な質問なので、大いに歓迎です。

通常言われているのは、全電源が喪失、つまり釜を冷やすための水を回すための予備の電源が全部とまってしまった。それは津波でそのバッテリーが流されてしまったことが原因だということの意味のことを東電は言っておりますが、その前の地震による影響がなかったのか。もしかしたら、地震で鉄塔が倒れたことは間違いなくて、そこでそもそも原発の細部に送られる電気が切れてしまったことがそもそもの発端だから、地震で倒れなかったら、今度のような全電源喪失がなかったのかもしれないですね。

順番でいきますと、確かにまず鉄塔が倒れて電源が切れて、それで電力供給がとまったので、本来ならば、そこで予備のバッテリーで電気を送って、お風呂の水を循環させる、その予備のバッテリーまでも流されてしまったということですからね。どれが大きな原因かということ、やっぱりどちらも原因であったとしか言わざるを得ないんですけど、最後の致命的な事故は、その全電源が流されてしまったと、バッテリーが流されてしまったことによるんだという理解をしようとしていいかもしれませんね。ただ、これはあれですね。いつも東電、あるいは電力会社の想定という問題で逃げられるんですが、電力会社は、「まさかあんな高い津波が来るとは思いませんでした」というのを言いわけの一番大きな武器に使っていますね。

津波がなくて地震だけだったら大丈夫だったんですかという質問にも、本当は電力会社は答える義務があると思うんですが、そのところはなぜか、あんまり出てこないんですね。本当の意味での地震対策、津波対策。つまり、全く津波が想定されないようなところでも、地震でつぶれることはあり得るという前提に立って、もう一度福島第1の検証をし直さないうちに、ここから先は政策的な意見なんです。大飯の原発の再稼働を本当に認めることができるんですかねという意見が、今あちこちから出ていますね。いわゆるストレステストの第1次審査だけで再稼働を認めるべきなのかどうかということは、これは結論部分は皆様それぞれいろんなお考えがあると思うんですが、今そういう時期に、非常に重要な時期に差しかかっているという状況認識はぜひ皆さん共有していただきたいと思います。

○会場 ありがとうございます。私も初回はちょっと来れてないんですけども、一応データを見せていただいて、今回の部分で、やはり朝日新聞のいわゆる新聞報道と災害というあたりで、先生もそのご出身であるということで、非常に貴重なテーマを取り上げていただいて、私たちのこういうふうな庶民に非常に普及してくださる運動という、国際理解研究所のご尽力に敬意を表します。

例えば、私はまずは先生にお尋ねしたいのは、全般にこの3.11の災害があって、私たちは行動によって、非常に啓蒙思想と申しますか、みんなが賢くなったとか、本当に知らないことを毎日毎日、新たな新たな難しい諸問題を提起づけられているわけですね。一番国民にとっては、家族のきずなであり、危機管理の非常に新たな重要さを教えてもらっているということで、専門家が細分化して、今回感じたのが気象学者とか、地震学者とか、原子力学者のような専門家の力のなさを感じて、山本義隆先生がおっしゃる、本当に、やはり無免許運転で、私たちがこういうふうなところへ来て、より賢くなって、やっぱり一人一人がやっぱりやっていけないといけないうなど。だけど、専門家は何してるんだという、その力のなさも腹立たしくも思うんですけども。

次回に、また新たな、「近くて遠い朝鮮半島」という、こういう問題提起をなさって、もう私はすごくいいなと思ってる。こういう講座をどんどん地域に広めていただきたいなということです。

先生、災害と行動というものは先生の姿勢ですね。今回の一連の。これから延々とまた続くでしょう。レベルの高い行動、それからもう新聞したもの、それからスピード感、一方で若者の活字離れがある中で、どういうふうなお考えを持ってらっしゃるのか。

○中川 国際理解研究所に大変温かい励ましをいただきまして、まず感謝申し上げます。

専門家が非常に頼りないというのは、私はちょっと気の毒だと思うのは、やっぱり専門家はそれなりの分野で、我々の到達し得ない領域を築いて、私は頭が下がる部分もあるんですが、問題はその専門家がまさに今度の原発に関して、入り口に大きな門をつくり、周りに高い垣根を張って、中に入れなくしたし、我々も入ることをあきらめたとか、やめてしまったという部分が、特にこの原子力問題についてはありますね。原子力業のすべての専門分野、やっぱり近代というのは、まさに西洋文明というのは、ある意味、細分化と専門化が1つ大きな特徴で、このこ

とが今度の原発事故でとつても反省を迫られていると私は思うんです。ですから、問題は専門家ががだらしのないわけでも、それから我々がそれをその専門家の領域にアプローチすることを怠っていたことが一概に悪いというわけでもないけど、やっぱり双方に対話の努力が当然必要なわけですね。専門家のやっていることも、絶えず我々一般民衆、国民は見ているのですよと。そこをつなぐものにはジャーナリズムが本来あるべきだったわけです。ですから、今回検証しなければいけないのは、なぜ専門家と一般民衆の間にこういう乖離ができてしまったのか。本来それを補うべき、こここのところのパイプ役を果たすべきメディアが何をしてきたのだろうかという検証が、一方で1点メディアに対して必要だと思いますね。これについてはまだ検証が進んでいるところだと思うのですが、それにつけても1つだけ指摘しておきたいのは、今回、3.11というのは非常にいろいろな光景が目の前に展開されましたね。大地震、大きな津波、水害、それから原発事故に伴う放射能汚染。それから、小さな例では、東京近辺で起きたし、大阪でも一部ありましたね。買い占め、買いだめ騒ぎですね。これ一つ一つ見ていると、戦後の日本社会がその都度起こしてきたさまざまな大きな出来事が一遍に起きたわけですね。地震はもちろん、直近の例で言うと阪神大震災です。それから、水害という点で考えると、やっぱり1954年のやっぱり伊勢湾台風、4,000人余りの方が亡くなりましたね。放射能ということになると、例のビキニです。伊勢湾台風が1959年でしたね。ビキニが1954年。子ども心に、あのときの放射能の恐怖のほうが、私は実は心に非常に強く残っているのは、当時ラジオ放送しなくて、ラジオで、あのころ計数器はガイガーカウンターというのがありました。ガーガー音を立てるんですね。日本に持ち込まれた、南太平洋から持ち込まれたマグロに計数器を当てると本当に不気味な音を立てる。子ども心にあの恐怖心というのは本当にすさまじいものがあったと思います。それはまた今度。それから買いだめ、買い占め。先ほどもちょっと触れましたが、1973年の第1次オイルショックのとき起きた物不足騒ぎですね。日本の戦後が抱えてきた折々の大惨事が、今度一遍に起きて、まだ右往左往してしまったというのは、私はこれまでの戦後の歩みの一つ一つの事件に関して、十分に検証作業がなされていれば、今回こんなに慌てずに済んだんじゃないかと思うんですね。それぞれの事象について、例えば、伊勢湾台風なら伊勢湾台風、阪神大震災なら阪神大震災、ビキニマグロ事件、こういったこと、あるいは買い占め。本当にもっともっと専門ということに対して適切な検証をしていれば、これほど慌てないで済んだのではないかと思われれます。戦後、私たち日本人というのは、一つ一つの出来事に対して真摯に向き合う姿勢というのをどっかでちょっと失ってしまった嫌がありますね。そのことについて、「ちょっとおまえ少し目を覚ませ」という、またこれ「天の声」ですけど、そういう「天の声」が今度まとめて私たちに投げかけられた、そんなような気もするんです。ですから、これからはもう人任せにはいたしません。私たちも、一人一人知り得る限りの知識を身につけて、それでさまざまな出来事に自分なりの意見を持ち対処していきますと、そういう心構えが本当に必要なんではないかなということをもう一度気づかせていただいたと思うわけです。

○会場 今回のこの東日本の大地震で、日本という国全体が今大きな打撃を受けたんですけども、私が半年前に行って、今現在、東北、福島、宮城、岩手というのをちょっと今、最近の状態というのを知らないんで、ちょっとこういうことを言わせていただくんですが、私が半年前に石巻と郡山に行ったときは、やっぱり同じ日本で何でこだけ意識の差、いわゆる特に関西、四国、九州、全然災害受けてなくて、いわゆる新聞とか、報道だけでしかわからない。これをいかにして意識を共有できるようにしていただけるかという。これが、いわゆるマスコミ、新聞のやっぱり責任じゃないかなと思うんです。

今、先生は、昔その新聞社におられて、そういう新聞の使命というものをもう少し果たしていただけるように、今のその知り合いの方に、もっと伝えていただきたいと私思ってるんですけど。今本当に大阪においてね、「今ほんまに災害あったの」っていう、「単なる映画見てるだけとちゃうの」という意識が、私、ものごっつい強いんです。そやから、そういうことないように、日本全体で今の被災地を助けるような状況というのをもっとつくり上げてほしいんです。今、被災地の記事見ると、お涙ちょうだいの記事ばかりなんです。あんな載せてもうたら、私、非常に腹立つんですわ。実際がもっとあの人たちは、毎日の生活どれだけ苦しいかいうのはだれにも言ってないのに、それを新聞が道で眺めて、お涙ちょうだいの記事を並べるというのね、そういうのだけはもうやめて、日本全体が被災地を全員で盛り上げるというか、再生させるという、そういうことを何とか伝えていただきたい。これ先生というんじゃないで、先生の知り合いの新聞社の方にちょっと伝えていただきたい。

○中川 本当にそうですね。今おっしゃった、お涙ちょうだいな記事は、被災者の人たち自身の実像でもないし、しかも被災者の人たちがそう伝えてほしいと思っていない。いわゆるステレオタイプの報道が日々を占める中で散見されること、本当に私たち自身も腹立たしい思いになるのですが、一方で、本当に事の本質に迫ろうとする、その姿勢がよく伺える記事もある。例えば、朝日新聞の3面に掲載されている「プロメテウスの罫」といった、ああいうような記事は本当に事実の、事態の本質に迫ろうとする記事、そういう姿勢がはっきり伺える記事もあります。ぜひそういう記事を励ます方向で、そういう一般読者の方たちの声というのは、書いている当事者に伝わるんです。この記事は読者に届いた。この記事は届いてない。それは投書とかそういったことしなくても届くもんです。ですから、皆様のその熱い気持ちは、きっと今の新聞社の記者にも届いているはずですし、私自身ももちろん機会あれば、きょうのような声もぜひ直接今の新聞社には伝えたいと思います。これはお約束しておきます。

本稿は、2011年度帝塚山学院大学国際理解研究所・(財)大阪狭山市文化振興事業団主催国際理解公開講座(後期)における講演をまとめたものである。